

9月8日「何のために生きるのか？」ローマ 14：1～9 ルカ 14:1～6

いきなりですが、問題です！週報の右下の欄を御覧ください。ユダヤ教の過ぎ越し祭では、旧約聖書の出エジプトの物語になぞらえて、少し変わったパンを食べます。それは次の3つの内、どのパンでしょうか？

- ① 大きく丸める時間がなかったので小さな粒のパン
- ② 発酵させる時間がなかったため、膨らんでいない平べったいパン
- ③ 焼く時間がなかったため、生焼けのパン

これは、先日放送された「世界ふしぎ発見」のエルサレム特集での問題です。長年、教会に通われているクリスチャンの方であれば、是非とも解けて欲しい良問でした。さあ、皆さんは答えが分かりますか？正解は②のマツアと呼ばれる種無しパンです。ウエハースのような平たく固いパンで急いでエジプトを脱出するために発酵させる時間がなかったのです。聖餐式の時に私たちは普通のやわらかいパンを食べますが、イエスが裂いたのはこのような固いパンだったと言われています。

さあ、この問題に正解出来た方？聖書を良く読んでいる素晴らしいですね！正解できなかった方は・・・もちろん冗談ですが、こんな風にテストをして、教会のなかで競い始めたら何だか嫌な感じしますよね？でも、「～を良く出来る人・出来ない人」と言う風に人を区別してランキングをすること、世間一般では良くあると思います。そして教会の中でも往々にして起こると思うのです。最近、ある牧師の悩みを聞く機会があったのですが、その方の教会ではとある熱心な役員さんが、他の役員の方に聖書の通読を何回したかをしつこく尋ねるのだそうです。そして回数少ない役員に「あなたは信仰が足りない」と責めるので大変困っている・・・というのです。皆さんにも、同じような経験をされた方があるかもしれません。そして、最初期の教会にも同じような問題があったようなのです！

今日のローマ書に書かれたパウロの言葉はこうありました。

「14：1～3 信仰の弱い人を受け入れなさい。その考えを批判してはなりません。何を食べてもよいと信じている人もいますが、弱い人は野菜だけを食べているのです。食べる人は、食べない人を軽蔑してはならないし、また、食べない人は、食べる人を裁いてはなりません。」これは、パウロからまだ行ったことのないローマの教会に宛てた手紙です。どうやら、当時の教会にはお互いに裁き合うと言う問題があったらしいのです。例えば、教会の中に野菜だけしか食べない人（ベジタリアン）がいた。そのような人達

を、肉や魚も食べる人が「あいつは変な奴だ」と蔑む。一方で野菜しか食べない人達も、肉や魚を食べる人達を「罪深い者たちだ」と断罪していたようです。他にも、ある日を特別視するとか、色々あったらしい。このように互いに断罪しあうところに神さまの恵みと祝福があるのでしょうか？あまりないと思います。先ほど、紹介した牧師さんも教会の中が終始ギスギスしていて、礼拝に来るのが喜びではなく苦痛になっていると嘆いておられました。

実は現代でもキリスト教には多様なグループがあります。私の大学の後輩に「セブンスデーアドベンチスト」という教派出身の者がいましたが、彼は禁酒・禁煙・で肉食は一切しません。また安息日を遵守するため日曜日に休めない仕事に就くことは許されないそうです。他にたとえば「アーミッシュ」という一切の文明的なものを拒否し、絶対的な平和主義を唱えるキリスト者のグループもあります。彼らは、小さな集落を形成して、電化製品などを一切利用せず、馬などを用いた原始的な方法で生活をしています。私たちの多度津教会の源流となった「メソジスト」も元々は大変規律が厳しい教派で特に禁酒は絶対でした。それは、メソジスト運動が始まった当時、宣教の対象であった産業革命によって都市に流入した貧しい人々の中には、アルコール依存症で苦しむ者が大勢いたからです。日本でも有名なウェルチというぶどうジュースがありますが、これも、そのような人達と聖餐式を行うために開発されたジュースなのです！

このように、同じキリストを信じ、同じ聖書を読んでいるはずなのですが、それぞれの教派や伝統によって生活の習慣や重きを置く事柄が異なっています。そのこと自体は私は悪いことだとは思いません。皆一様に一緒なことほど気持ち悪いものなどありません。考えてみてください、皆が何を聞かれても同じことを回答する宗教を・・・それは信仰ではなく洗脳です。私たちはそれぞれに愛唱聖句が違えば、好きな讃美歌も違います。それで良いのです！神さまは私たち一人一人を違うように作られたのです。それが神さまの祝福です。問題は、それぞれ違って当たり前なのに、そのことが原因で互いに裁き合うようになっていたことでした。神さまの祝福を祝福として受け取れない弱さが人間にはあります。そして他者との違いを強調し、裁き合うのです。パウロはそのことを良くないことだと考えたのです。「**信仰の弱い人を受け入れなさい。その考えを批判してはなりません。**」

なんでダメなんでしょう？礼拝の雰囲気が悪くなるから？喧嘩になったら困るから？いいえ、パウロはそのような一般的な事柄から、良くないと思ったのではありませ

ん。こう書いてあります。「神はこのような人をも受け入れられたからです」私たちは皆、どれだけ罪深く思える人も、弱く情けなく思える人であっても神さまに受け入れられているのです。神の愛を人間が否定してはならないのです！

このことを説明するのにパウロは面白い譬えを用いています。「**他人の召使を裁くとはいったいあなたは何者ですか？**」召使とは誰か、わたしたちキリスト者です。そしてその主人は・・・？もちろん、イエス様であり、神さまです。「夫婦喧嘩は犬も食わぬ」とか言いますが、今でも他人の家のことに口を挟むのはナンセンスだという感覚が私たちにはあると思います。そのように他人の信仰のあり方にけちをつけるのは余計なお世話だとパウロは言いたいのです。だって、私たちは神さまのものなのですから！召使が立つのも倒れるのも主人次第なのですから。ただし、この主人はそんじやそこらの主人ではありません。罪に打ちひしがれ、倒れていた召使を罪から清めて、立ち上がらせることができる最良の主人だとパウロは強調します。「**しかし、召し使いは立ちます。主は、その人を立たせることができになるからです。**」そんな主人が選んで、受け入れた召使なのですから、他の召使からとやかく言われる筋合いはないのです！

今、祈祷会では創世記のアブラハム物語を読んでいます。前はアブラハムのスキャンダルとでも言うべき、あまり信仰者らしからぬ行動の記事を読みました。アブラハムがエジプトに降った際に、自らの身の危険と引き換えに妻のサラを偽ってエジプトのファラオに売り渡すのです。アブラハムはそのことで大きな富を得ることになりますが・・・気になる方は祈祷会へ！。こういった物語は、アブラハムを立派な信仰の父だと思いたい私たちにとって大きなつまずきにもなります。でも、聖書は、そういうスキャンダルを何のためらいもなく描きます。これはアブラハムに限らず、モーセやダビデやすべての人間について同じです。モーセはそもそも前科者の人殺しです。ダビデは長男に反乱を起こされ、他人の妻であったバトシェバを罪深い仕方で奪います。皆、今の基準でも相当な罪人です。たぶん旧約聖書はそういったことから完全な人間などいないということを伝えています、完全なのは神さまだけだからです。だからこそ、私たちにイエス様が罪を贖ってくださる必要があったのです。私たちは罪赦された者同士、互いに赦しあいながら歩むのではないのでしょうか？

皆さんはコメニウスと言う人を知っているでしょうか？キリスト教の牧師ですが、教育者として有名で、日本でも行われている同一年齢、同時入学、同一学年、同一内容、同時卒業といった仕組みや女子教育を唱えました。そして教育によって、戦争が終結し、平和が訪れることを望んだのです。この考えは現在のユネスコに受け継がれています。

彼は牧師としてこんな言葉を残しました。

キリスト者が調和して生きるために、3つの重要な掟がある。

どうしても必要なことについては、なんとか一致を保つこと。

あまり必要ではないことについては、自由を認めること。

すべてのことについて、愛がみんなを支配するようにさせること。

コメニウスは宗教改革の後、ドイツの30年戦争など、カトリックとプロテスタントに分かれてキリスト者同士の戦争によって多くの命が奪われる時代に生まれました。その戦争で、妻や2人の子どもも失ったそうです。そんな彼だからこそ、一致と自由と愛の必要性に気付いたのではないのでしょうか？

パウロも「裁きあうな」と禁止だけを語っているわけではありません。こう言っています。「7～9節 わたしたちの中には、だれ一人自分のために生きる人はなく、だれ一人自分のために死ぬ人もいません。わたしたちは、生きるとすれば主のために生き、死ぬとすれば主のために死ぬのです。従って、生きるにしても、死ぬにしても、わたしたちは主のものであります。キリストが死に、そして生きたのは、死んだ人にも生きていた人にも主となられるためです。」

大事にすることは、それぞれが決めれば良い。大切なことはそれぞれが何の為に生きるのか分かっていること！私たちは主のために生きるのです！ここだけはぶれてはいけない！逆にここさえぶれなければ大丈夫なのです！それは、軍国主義や全体主義のような、人々を犠牲にさせるものではなく、コメニウスがいうように「すべてのことについて愛がみんなを支配するようにさせること」であると思います。パウロは同じローマへの手紙でこうも勧めています。「12:10 兄弟愛をもって互いに愛し、尊敬をもって互いに相手を優れた者と思いなさい。」

今年はちょうど教会創立130周年、愛光保育園創立96周年をお祝いする年です。これまでの、教会と保育園の歩みのことを考えながら過ごしていますが、どちらにも危機の時代はありました。戦時中や経営難の時代、今もそうかもしれません。やっぱりその時々で、先輩たちが信仰の基本に立ち返り、祈り働いたからこそ、今の私たちの教会と保育園があるのだらうと思います。私たちは何のために生きているのか？主のために生きている。むしろ主によって生かされ、立てられている。このことに信頼する時、わたしたちの歩みは確かなものになっていくのではないのでしょうか。